

2026年度 入学試験問題

第2回 特選コース（S特チャレンジ）

国語

（45分）

〔注意〕

- 1 この問題冊子は、試験開始の合図で開くこと。
- 2 解答用紙は、問題冊子にはさんであります。試験開始の合図があったら、解答用紙を取り出して受験番号と氏名を記入し、受験番号をマークすること。
- 3 解答は全て解答用紙に記入しなさい。
* 字数制限のある場合は、特別な指示がない限り、すべて句読点や「」（ ）などの記号を含んだ字数として解答すること。
- 4 印刷が不鮮明な場合は申し出ること。
- 5 問題冊子の余白等は自由に使って構いません。
- 6 試験終了後、解答用紙のみ提出し、問題冊子は持ち帰ること。

東京都市大学等々力中学校

一 次の――線の漢字はひらがなに、カタカナは漢字に直して答えなさい。

- 1、絶版ぜつばんになった本。
- 2、弁舌べんぜつさわやかな人。
- 3、寺院しよんを建立けんりつする。
- 4、水郷すいこう地帯ちたいを散策する。
- 5、過去の不正ふせいを暴く。
- 6、人のケハイけはいがする。
- 7、アンイあんいな考えを改める。
- 8、ガラスのハヘンはへんを拾う。
- 9、試合しあひのケイセイけいせいが逆転する。
- 10、幸運しゆんがタビカサたびかさなる。

二 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

中学二年生の「ぼく」橘論里たちばなろんりは、自身が通う学校の開校二十周年記念の行事に向け、同じクラスの轟元とろきげん気や水原白らみずはらましろとともに、実行委員を引き受けることになった。長い時間をかけて準備を進めてきた行事が、いよいよ当日を迎える。

冬至とうじの朝の空は、薄い雲に覆おおわれていた。冷えこみもいちだんと厳しい。

終業式を終えた生徒たちは、手渡された成績表に A 喜 B 憂しながら、それでも晴れやかな顔つきで校門を出ていった。明日から冬休みが始まる。

グラウンドには、すでに半分以上の紙コップが並べられている。全校生徒の手で並べられたものだ。下校する前に、クラスごとにまとまって、ひとり二個ずつ置いてもらった。慣れない生徒たちのやることなので時間がかかるかと思っていたら、みな思いのほかてきぱきと動いてくれて、

① 作業は予想以上に早く終わった。残りの部分は、あとで実行委員が埋めていく予定だ。一般の生徒たちはいったん家に戻り、キャンドルナイトの始まる時刻にまた集まることになっている。

ぼくたち実行委員は、このまま学校に残って最後の準備に取りかからなければならない。それぞれ持参した弁当を、教室に持ちこんで食べた。

(中略)

昼食の後、グラウンドで最終チェックをしていると、校舎のほうから進藤先輩^(注2)が手を振りながらやってきた。他の三年生の委員たちもつぎつぎ集まってくる。原先輩もいる。木崎先輩は苺色のマフラーを巻き、周囲に華やかな笑顔をふりまいている。

「よし、じゃあ始めようか。各自、空いている場所にキャンドルを並べてください」

ぼくが声をかけると、みな図面を手を散らばっていく。紙コップの底に砂を入れる者、キャンドルを入れていく者、コップを並べる者、手分けして広いグラウンドに星座を作っていく。

「おーい、ここ、下絵が消えかかってる！」

「ねえ、キャンドル入っていないのがあるよ」

「ここの星って、紙コップ何個？」

ぼくはあちこち駆け回りながら、キャンドルの位置と個数を入念にチェックしていった。準備をしながら時折ちらりとあたりを見回す。大和^(注3)の姿はやっぱりなかった。

と、水原がぼくのほうへ近寄ってきた。困ったような顔をしている。

「ねえ、ちょっとこれ見て。なんだと思う……?」

手近にあった紙コップをひとつ持ちあげ、裏返してみせた。なにか文字が書いてある。

「なにこれ。『K 高合格』……?」

「こっちは『T 坂先輩』だって。ハートマークも付いてる」

同じように、底に文字の書かれた紙コップがいくつも見つかった。一般の生徒たちの並べたものらしい。ぼくたちが首をひねっていると、進藤先輩がにこにこしながら近づいてきた。

「あ、気づいた? それ、いいアイデアだろ」

話を聞いて C。

——冬至の夜に、キャンドルに願い事を書いて灯すと望みが叶う。太陽の力のいちばん弱まる日、炎はあらゆる力を吸いあげて光を保とうとするからだ——

そんな怪しげな噂を、ひそかに校内に流したのだという。

「べつに、わざと流したわけじゃないよ。うそをついたわけでもない。ぼくはただ廊下で、原たちと、そうだったらおもしろいになあつて話をしていただけ」

ぼくと水原はあんぐりと口を開いた。

「まさかここまで効果的とは思ってなかったよ。でも、おかげでみんな競って並べてくれただろ？」

進藤先輩はそう言つて笑顔を見せると、再び作業へ戻っていった。

「先輩、すごい」

その後ろ姿に向かつて、水原がぼつりとつぶやいた。

(中略)

最後のミーティングは、実行委員室でやった。ずっと外にいたせいでみんな冷えきってしまったからだ。今日、これからの流れを再確認する。ぼくはみんなの前に立ち、声を張りあげた。

「ええと、まず、これが終わったらすぐにグラウンドの本部テント前に集合、三時半から校長先生や来賓の方々の挨拶があり、その後四時からキャンドルに点灯します。そのとき、非常灯を残して校舎内の明かりが消えるので、点灯の合図があったら順次キャンドルに火をつけていきます。点火用ライターは、段ボール箱に入れたものが本部テントに置いてあるので、そこから出して使ってください」

伝え忘れないかなんども予定表に目を通す。

「屋上への誘導は、保護者の方々がやってくださるので、各自その指示に従ってください。キャンドルの消灯は六時です。それまでは自由に見てもらつて構いませんが、十分前になったら本部に集合してください。火を消した後片づけをした後、解散です。以上、なにか質問はありますか？」

少し待つて質問がないのを確認してから、進藤先輩の顔を見た。一言、挨拶をしておもうと思ったのだ。けれど先輩は、きみがやれ、というようにうなずいてみせた。ぼくが？と目顔で問うと、先輩はもう一度うなずく。

D。挨拶なんてなにも考えていなかった。
顔を上げて目の前の委員たちを見渡す。

この四月に初めて集まってから、ずいぶん時間がたった気がする。アンケートの集計から始まって、最初はなにをやるかさえ決まっていなかった。ぼくが苦し紛れ^{まぎ}に出したキャンドルナイトという案が、なぜかみんなに受け入れられて、いつの間にか副委員長になった。テーマでもめて、下絵で苦労して、リハールを三回やって、最後に中止の危機も乗り越えて、ようやくここまで漕ぎ^こつけた。あとはもう、火を灯すだけだ。そのとき、ふいに、終わってしまうのが惜しくなった。あんなにいろいろあつたのに、もう少しこの時間が続けばいいのに、とまで思ってしまう。それでも、もう点灯時間が迫っている。みんな、ぼくの声を待つようにこつちを見ている。

「みんなの力で作りあげた、キャンドルナイトです」

自然に口が動いていた。全員の顔を見渡し、ひととき大きな声を出す。

「——今日はせいっぱい、楽しましよう！」

「おう！」

驚いたことにみんながぼくの言葉に応えてくれた。

「よっしゃ、燃やすぞー！」

サッカー部の三年生が気合いとともに叫び、たちまち周囲にたしなめられる。

「だめだって、燃やしちゃ」

「そうそう、つけるだけ」

委員たちはみなにぎやかに笑い声をあげながら、ぞろぞろと教室を出ていく。それを見送りながら、少しだけじんとしてしまった。

(中略)

ぼくたちがグラウンドに歩みでると、みんながその後に続いた。間隔を取りながら、ばらばらに散っていく。進藤先輩はぎよしゃ座のカペラの前に立ち、元気はこいぬ座のプロキオンに陣取っている。木崎先輩はおおいぬ座のシリウスの前につく。水原は、オリオン座の三ツ星のところにいた。

「せっかくだから、リゲルに行けば？ 一等星の」

ぼくが声をかけると、水原は首を振って、

「ううん。ここがいい」

と笑った。ぼくは小さくうなずき、同じオリオンのベテルギウスのあたりに立った。

そこからぐるりと周りを見渡す。みんなそれぞれの位置についていた。暗がりの中、千五百個のキャンドルが、これから火をつけられるのを静かに待っている。

ふと、命の始まる前は、^②こんな感じなんじゃないかと思った。

そのとき、校舎の明かりが消えて、カウントダウンが始まった。

「十、九、八、七、六、五」

目を閉じてその声を聞く。

「四、三、二、一、――」

今は、真つ暗な闇^{やみ}だけがある。

「点火」

カチリ、とかすかな音をたてて炎が現れた。キャンドルの芯^{しん}にその火を移す。

ぼうつ、と灯りが灯った。

紙コップに反射した光がやわらかくあたりを照らす。

わあっ、と周囲から声にならない声があがった。

初めに灯すのは、一等星の星々だ。周りで見ている人には、きつと暗闇の中、星が生まれていくように見えるだろう。

カペラが灯る。ポルックスが灯る。ひとつ、またひとつと星が輝きはじめる。順に火を入れ、七つの一等星すべてがそろったところで、冬の大

三角と、六角形の冬のダイヤモンドが姿を現した。

続けて、二等星にも火がつけられていく。校庭のあちこちで、ぼつり、ぼつりと金色の炎が広がっていく。

初めに星々に火を入れるべきだ。そう強く主張したのは、水原だった。

「だって、初めにあったのは星でしょう？　そしてそれをつないだのが星座だもの。その逆じゃないわ」

そう言って譲らなかった。

やがて、校庭にすべての星が出そろった。

今はまだ、空にあるのと同じ、ばらばらの星たちだ。これからそれをつないで星座に変えていく。ぼくたちはつぎつぎと火をつけていった。

手のひらに収まるくらいの小さなろうそくの灯りが、つながり合って、やがて地面に^③大きな物語を描きだす。闇の中、ろうそくの燃える匂いがした。こんなに小さな炎なのに、足もとがほんのり暖かい。夢中で火をつけていると、とん、となにかやわらかいものが肩に触れた。水原だった。いつの間にか、足もとにオリオン座が完成していた。そのとき、水原の言っていた言葉の意味がずっと胸に落ちた。

——初めにあったのは星でしょう？

ああ、そういうことか。

頭ではわかっているつもりだった。だけど今、^④もつとべつの深い場所で、それがきちんとわかった気がする。

(市川朔久子「紙コップのオリオン」より)

(注1)「キャンドルナイト」……電気による照明を消し、ろうそくの火を灯して静かに夜を過ごそうというイベント。

(注2)「進藤先輩」……実行委員長。受験が近いため、彼を含め三年生の先輩たちはあまり準備に参加できていない。

(注3)「大和」……論里たちのクラスメイトで実行委員の一人だが、あまり学校に来ていない。

問一、この文章は、誰の視点で書かれていますか。その人物を特定できる言葉を文章中から四字で探し、抜き出して答えなさい。

問二、

A

・

B

に共通してあてはまる漢字を答えなさい。

問三、——線①「作業は予想以上に早く終わった」とありますが、それはなぜですか。その理由を説明した次の文の空欄にあてはまる言葉を文中から指定された字数で探し、最初と最後の三字ずつをそれぞれ抜き出して答えなさい。

1、二十一字

と聞き、

2、十二字

から。

問 四、C・Dにあてはまる言葉として最も適当なものを次から選び、それぞれ記号で答えなさい。ただし、同じ記号は一度しか使えません。

ア、後悔した イ、困った ウ、驚いた エ、怒った

問 五、——線②「こんな感じ」とは、どのような感じですか。それを説明した次の文の空欄にあてはまる言葉を、文章中の言葉を使って十五字以内で答えなさい。

これから 十五字以内 感じ。

問 六、——線③「大きな物語」とありますが、これは何をたえていますか。文章中から探し、抜き出して答えなさい。

問 七、——線④「もっとべつの深い場所で、それがきちんとわかった」について、次の各問いに答えなさい。

1、「もっとべつの深い場所で、それがきちんとわかった」を別の表現に言い換えた言葉を文章中から十字以内で探し、抜き出して答えなさい。

2、「それ」とは何を指していますか。それを説明した次の文の空欄にあてはまる言葉を文章中から二字以内で探し、それぞれ抜き出して答えなさい。

初めにあったのは I、二字以内 ではなくて II、二字以内 だということ。

問 八、この文章に登場する人物の説明として適当でないものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア、「ぼく」は苦し紛れに「キャンドルナイト」を提案したが、準備を進めていくうちにやりがいを感じていた。

イ、「ぼく」は実行委員たちが気持ちよく作業できるよう、自分がやることになった任務に責任をもって取り組んだ。

ウ、「進藤先輩」は副委員長である人物を立てつつ、後輩たちのためになると思うことは積極的に実行した。

エ、「水原」はがんこな性格であり、自分の意見を通すために対立する人の考えを認めようとしなかった。

三 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

高校生ぐらいまでは、フィーリング共有性の高い、同世代で自分と同質の小さな集団のなかで自己完結し、そこで閉鎖的な仲間集団を作って生きていることが多いと思います。

A、学校を卒業してやがて社会に出れば、自分たちと同じ属性を帯びる集団以外の、さまざまな世代や違う価値観をもった人たち、違う地方や、場合によっては外国からきた人たちなどとの出会い、関係を作っていくなくてはなりません。

①「社会的な関係」にはいると、フィーリングの合う人とだけ付き合うというわけにはいきません。だからそれまでに、自分のなかに異質なものを取り込めるようなある種の構え、というものが、自分の中にどうしても必要になってくるのです。

となると、やはり単に「こいつは俺と同じだ」という同質性だけに頼って友だちをつなげていくような親密な関係の作り方だけをしていると、いきなり社会に出たときにどうしても戸惑いが大きくなります。

異質なものをさまざまに取り込む力がないと、つながりを保てなかったり、②異質な他者との交流といううま味も、味わえなかったりします。やはり、関係の作り方のポイントとして、異質性、あるいは他者性というようなものを少しずつ意識して、それを通してある種の親しみたくなものを味わっていくトレーニングを少しずつ心がけていくことが大切です。最初からというのは無理かもしれないけれど、少しずつ慣れていくのです。

さらにいえば、フィーリング共有性を重視してつながった関係の友だちでも、やはりその中にもフィーリングの違いが出てくることもあると思います。でもそれはそれとして、また違った形でフィーリングのつなぎ方をより深めていくきっかけとしてお互い認め合うべきです。ちよつとでも違つと、「あ、この人違つ」となつて、関係を保つ努力を放棄しては、人と関係を作る力もつきません。ある程度辛抱強さがないと、どのみち人づきあいはうまくいかないものなのです。

人との関係を作っていくたい、つながりたいという B な思いが一方であり、でもやっぱり傷つくのはいやだといった C な恐れ感情もある、それが人間です。私の印象では、若い世代であればあるほど、傷つきやすさ、というものを内面的に持っている人が増えているのかなあ、という気がしています。「傷つきやすい私」が増えているように思うのです。

「人とつながりたい私」と、でも「傷つくのはいやだという私」という一見すると矛盾した自我のあり方と、自分自身でどう折り合っていけばいいのでしょうか。やはり基本的には、③この人は自分にとって「信頼できる他者」だ、と思える人を見つけないということが絶対必要になると思

ます。

しかしその場合、信頼できる「私^{わい}と同じ人^{ひと}」を探すというよりは、信頼できる「他者^た」を見つけるという感覚が大事です。どういふことかという、信頼はできるかもしれないけれど、他者なのだから、決して自分のことを丸ごとすべて受け入れてくれるわけではないということ、しつかり理解しておこうということなのです。

D、この点をもう一度確認しておきましょう。「自分のことを百パーセント丸ごと受け入れてくれる人がこの世の中のどこかにいて、いつかきつと出会えるはずだ」という考えは、はつきり言つて幻想です。

「自分というものをすべて受け入れてくれる友だち」というのは幻想なんだという、どこか醒めた意識は必要です。でもそれは他者に対して不信感を持つことと決してイコールではないということは、ここまで読んでくれた皆さんになら、きつと理解していただけるはずですね。

価値観が百パーセント共有できるのだとしたら、それはもはや他者ではありません。自分そのものか、自分の〈分身〉か何かです。思っていることや感じていることが百パーセントぴたり一致していると思つて向き合っているのは、相手ではなく自分の作った幻想にすぎないのかもしれない。つまり相手の個別的な人格をまったく見ていないことになるのかもしれないのです。

きちんと向き合えていない以上、関係もある程度以上には深まつていかないし、「付き合つていても、何かさびしい」と感じるのも無理もないことです。

過剰な期待を持つのはやめて、人はどんなに親しくなつても他者なんだということを意識した上での信頼感のようなものを作つていかななくてはならないのです。

このことと少し関連するのですが、このところ、自分を表現していくことに対して、すごく恐れのある人が多くなっているのではないかと思うのです。

思春期というのは多かれ少なかれそういうものですが、それはなぜかという、「百パーセントわかつてもらいたい」とか、あるいは「自分の本当のところをすべてきちんと伝えたいじゃないか」と思つてしまうことが原因なのではないかと思ひます。それもやはり、^④「百パーセントの自分を丸ごと理解してくれる人がきつといるはずだ」という幻想を、知らず知らずのうちに前提しているためです。

むしろ「人というものはどうせ他者なのだから、百パーセント自分のことなんか理解してもらえつこない。それが当然なんだ」と思はずつと楽になるでしょう。だから、

E

(中略)

要は、親友にしても、恋人にしても、まるごとすべて受け入れてくれるわけではないんだけれども、自分のことをしつかり理解しようとしてくれている人と出会う——そういうレベルで、私たちは他者を求め、しつかりと向き合つて関係を深めていけることが、現実世界で〈生のあじわ

い」を深めていくためには必要なことなのです。

(菅野 仁「友だち幻想」より)

(注1)「属性」……あるものに共通して備わっている性質や特徴のこと。

問 一、

・

にあてはまる言葉の組み合わせとして最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア、A—さらに D—ところで

イ、A—だから D—さらに

ウ、A—だが D—あるいは

エ、A—しかし D—さて

問 二、——線①「社会的な関係」について、次の各問いに答えなさい。

1、「社会的な関係」に関連するものとして最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア、中学校の生徒たちが新聞部の活動で、社会科見学の成果について話し合った。

イ、高校生が授業で班に分かれて、その年の社会現象について話し合いを行った。

ウ、都内の大学の学生たちが集まり、社会貢献こうけんについてのスピーチを披露ひろうし合った。

エ、区役所の複数の課の職員らが、地域活性化に向けて今後の施策を話し合った。

2、「社会的な関係」を保っていくために筆者が必要だと思っている能力を文章中から十六字で探し、最初と最後の三字を抜き出して答えなさい。

問 三、——線②「異質な他者との交流といううま味」とありますが、これを別の表現で言い換えている部分を文章中から六字で探し、抜き出して答えなさい。

問 四、

B

・

C

にあてはまる言葉の組み合わせとして最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

- | | |
|---------|-------|
| ア、B—長期的 | C—短期的 |
| イ、B—積極的 | C—消極的 |
| ウ、B—主観的 | C—客観的 |
| エ、B—能動的 | C—受動的 |

問 五、——線③「この人は自分にとって『信頼できる他者』だ、と思える人を見つける」とはどのようなことですか。筆者の考えをまとめた次の文の空欄にあてはまる言葉を文章中から十二字で探し、抜き出して答えなさい。

自分のことを丸ごとすべて受け入れてくれるわけではないが、自分のことを

十二字

くれる人と出会うこと。

問 六、——線④「『百パーセントの自分を丸ごと理解してくれる人がきつというはずだ』という幻想を、知らず知らずのうちに前提している」について、次の各問いに答えなさい。

1、このような幻想を持っている人について述べたものとして適当でないものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア、自分を表現していくことに対して恐れを抱いている人。

イ、相手の個別的な人格を、まったく見ていないような人。

ウ、自分のことをすべてわかってほしい、と思っている人。

エ、他者に対してどこか醒めた意識を持っているような人。

2、このような幻想を抱く人がいる一方で、人との適切な関係を深めていくにはどのような人であることが望ましいと考えられますか。

それを説明した次の文の空欄にあてはまる言葉を文章中から探し、二字で抜き出して答えなさい。

人は親しくなっても

二字

なのだという意識を持ったうえで信頼関係を築ける人。

問 七、

E

にあてはまる言葉として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア、そこは希望の出発点ではなくて絶望の終着点だ
- イ、そこは希望の終着点ではなくて絶望の出発点だ
- ウ、そこは絶望の出発点ではなくて希望の終着点だ
- エ、そこは絶望の終着点ではなくて希望の出発点だ

問 八、文章中で述べられている内容として適当でないものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア、フィーリング共有性を重視してつながった友だち関係においても、フィーリングの違いは生じることがある。
- イ、フィーリングが違ったときは、フィーリングのつなぎ方を深めていくきっかけとしてお互い認め合うべきだ。
- ウ、価値観を百パーセント共有できる相手には自分の分身を見出すが、それはまぎれもなく他者であるといえる。
- エ、高校生ぐらいまでは、自分と同質の小さな集団の中で、閉鎖的な仲間集団を作って生活していることが多い。

問 九、次の資料は問題文の文章と同じ著作の別の部分を抜粋したものです。【資料】を読んで、問題文の文章とのつながりを述べたものとして最も適当なものをあとから選び、記号で答えなさい。

【資料】

私たちはある種の共同体的なつながりや関係の中で培^{つちか}ってきた、とりわけ日本人的な親しさの作法をお手本にし続けています。そこには確かに、損得を超えて人を全面的に包み込むような温かみや情愛の深さを受け継いでいる面もあるかもしれません。だから無^{むげ}下に否定してしまうわけにはいかないという側面が確かにあります。しかし、みんな同じような職業や生活形態を前提とするム^{注1}ラの作法では、もはや親しさを維持^{いじ}することはできないほど、私たちの置かれている状況は以前とはすっかり変わってしまったと考えた方がいい。ム^{注1}ラの伝統的作法では、家庭や学校や職場において、さまざまに多様で異質な生活形態や価値観をもった人びとが隣り合って暮らしているいまの時代^{注2}にフィットしない面が、いろいろ出てきてしまっているのです。そろそろ、同質性を前提とする共同体の作法から、自覚的に脱却しなければならぬ時期だと思っています。

（菅野 仁「友だち幻想」より）

（注1）「ム^{注1}ラの共同体」……同類が集まって序列をつくり、頂点に立つ者の指示や判断に従って行動したり、利益の分配を図ったりするような閉鎖的な組織・社会。

（注2）「フィット」……ぴったり合うこと。

ア、本文にある「付き合っている、何かさびしい」という感覚は、共同体的な人間関係を離れ、そのような関係性を無下に否定してしまったことによるものだということが、【資料】から読み取れる。

イ、本文では、「傷つきやすさ」を持った人が増えているという筆者の印象が述べられているが、そのような性質の人は、人を包み込むような温かみや情愛の深さといった、共同体的なつながりの中でこそ癒^いされる可能性があることが【資料】から読み取れる。

ウ、本文で「幻想」と表現されるような意識で友人に親しさを求めているのは、いまだに共同体的な「ム^{注1}ラ」社会の時代の考えを引きずってしまったことが原因である可能性を、【資料】から読み取ることができる。

エ、本文で述べられている「こいつは俺と同じだ」という同質性に頼って友だちをつなげていくような関係の作り方は、多様で異質な生活形態や価値観を持った人々が隣り合って暮らす現代だからこそ存在するものだということが【資料】から読み取ることができる。

九	八	七	六	五	四	三	二	一
			2	1			2	1

三

八	七	六	五	四	三	二	一	
	2 II	2 I	1		D	C	2	1

二

10	9	8	7	6	5	4	3	2	1

一

〈受験生はこれより上段には記入しないこと〉

問八

問六

1

2

問五

12

10

問四

問三

問二

1

2

最初

}

最後

問一

問八

問七

2

1

I

II

10

問六

問五

15

10

問四

C

D

問三

2

1

12字

21字

最初

最初

}

}

最後

最後

問一

問二

6	1		
	ケ		絶
	ハ		版
	イ		
7	2		
	ア		弁
	ン		舌
	イ		
8	3		
	ハ		建
	ヘ		立
	ン		
9	4		
	ケ		水
	イ		郷
	セイ		
10	5		
なる	タビカサ(なる)	く	暴(く)

注意事項
・解答は解答欄の枠内に濃くはっきりと記入して下さい。
・解答欄以外の部分には何も書かないで下さい。

氏 名

受験番号

0	0	0	0
1	1	1	1
2	2	2	2
3	3	3	3
4	4	4	4
5	5	5	5
6	6	6	6
7	7	7	7
8	8	8	8
9	9	9	9

評価点

2026年度 特選コース（S特チャレンジ）
第2回 中学校入学試験問題 〔国語〕 解答用紙（2月3日午後）